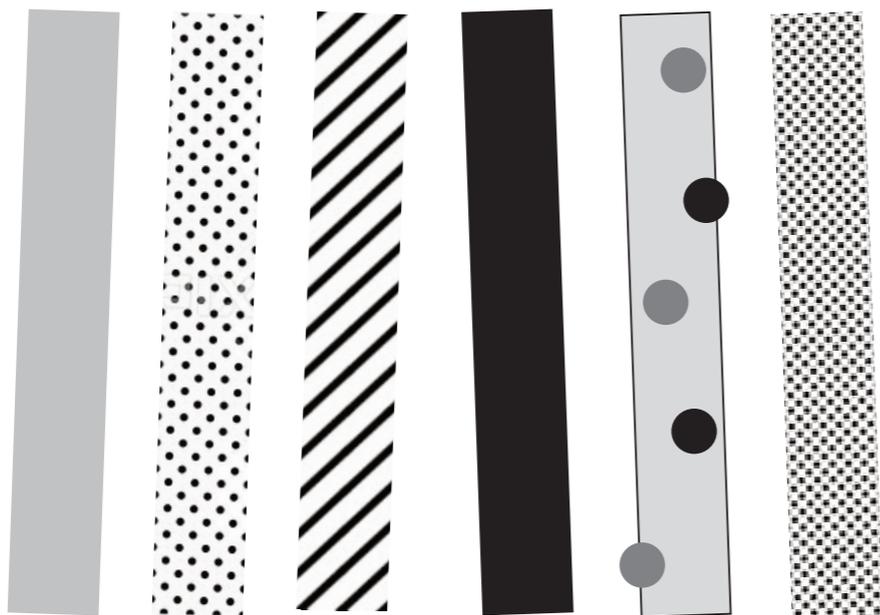

月 刊

MéLange

Vol.153



2020.07.26

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.153.2020.07.26

「月刊めらんじゅ」編集部

2020年
8月15日(土)

第23回



《朗読の伴奏&ソロ演奏》

フラメンコ・ギタリスト 福嶋隆児
第27回 フラメンコ・ルネサンス21
(2018年=全国的なフラメンコ・コンクール
のひとつ)のギター部門で「奨励賞=新人
賞」を受賞した人です。第一部と第二部の
合間に、ソロを演奏していただきます。

わたしたちには詩がある

《詩祭スケジュール》
8月15日(土)午後5時 開場
〔1部〕PM5:30~PM6:00
ロルカ詩の朗読
〔2部〕PM6:00~PM6:30
詩人たちの自作詩朗読

《場所》スペイン料理カルメン(神戸市中央区北長狭通1-1-1)
7-1 電話078-331-2228 6500012
JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩三分
《料金》A3500円(チャージ込み・税別) ①夏の特選
スープ ②季節のサラダ ③メインディッシュ
(4パエリア) ④コーヒーマカドーナツ
B2000円(チャージ込み・税別) ①ワンドリンク
(選択可) ②本日のタパス

《特典》当日参加者の方全員に、第二部参加の詩人たちが朗読する詩作品掲載の「八月一九日詩集23巻」を進呈します。

ロルカ詩祭

ダイヤモンドリングを待ちながら
千田草介

コロナは太陽をつつむ100万度の大気であり不可視であるが月に太陽がすべて覆い隠される皆既日蝕のときのみその輝きを見ることができる。同じ名をもつやはり目に見えぬ微小な自己複製物体が地球の知的生命体世界に恐怖とともに浸透しつつある今を去ること84年前の8月19日早朝ひとりの男がイベリア半島の土に埋もれた。フェデリコ・ガルシア・ロルカ。彼を埋めたのはフランシスコ・フランコという男の一味ファランヘ党。盟友だったアドルフ・ヒトラーを裏切って世界大戦に参戦しなかったがゆえ天寿を全うしたフランコのために1975年までの長きにわたってロルカは祖国で日蝕のように黒く塗り隠されつづけ、人びとは彼のことを口にすることすらはばかられたが、その言葉は異国へと輝いてわたった。言葉は風のように国境をこえて受け手のいるところにとどいていくのだ。今この神戸にも。言葉の信徒たる詩人たち、そして受け手たち、この百年の、いやもっと過去からの同朋たちの受難を想い、顔をあげて言葉のまなざしを遠くへとどかせよう。

ロルカは泣いている。それはどんな状況であれ、詩でしか表現できないことを、われわれは忘れてはいないか、そして詩の可能性を信じているのか、と問いつづけているからである。



若き日のフェデリコ・ガルシア・ロルカ
(1898-1936)

ロルカ詩祭会場 スペイン料理 **カルメン**



☎078-331-2228
神戸市中央区北長狭通
1-7-1 カルメンビル2F
阪急・阪神・JR・地下鉄の
各三宮駅から徒歩1~4分

「月刊めらんじゅ」153号 目次

詩

- とりはだ／鍵……………中嶋康雄 6
積ん読の Pantomime／記憶の不全……………野口裕 7
鍋の底……………黒田ナオ 8
モナリザ ……………月村香 9
かげろう……………大橋愛由等 10
一枚の紙切れ ……………田村周平 11
波の音に少しのワインを ……………大西隆志 14
人の絨毯 ……………高谷和幸 15

連載小説

- 6回目+7回目／「カフカ教団」……………高木敏克 04

お知らせ

- 第23回ロルカ詩祭……………8月15日開催 ロルカ詩祭実行委員会 03

連載エッセイ

- 《本のひと皿》「甘い憧憬の一杯、蜂蜜酒」……………安城位久緒 12

- 「益田っ通信 No.45」……………元正章 13

- 神戸詞あしび 142 「隣国について知っているつもりはなかったのだが」……………大橋愛由等 16

編集部だより★73/どうやら新型コロナウイルス蔓延の「第二波」が到来したようである。これでもういちど緊急事態宣言を出して休業要請をしようものなら、この国の経済は、たちいなくなるだろう。今回は、宿泊業・飲食業という、日々の来客によって成り立っている経済の脆弱部分が危機にさらされている。第二波が終息に向かうと今度は第三波の到来を怖れるだろう。ふたたび都市が半封鎖の状態になれば、ひとの移動がさらに減少し、ひととひととの距離を取るというソーシャルディスタンスという名の他者を忌避する傾向が強まっていくだろう。またコロナ以後の新生活提案なるものが発表されているが、これはまさに大政翼賛的な発想であると、提案者は気づいているのだろうか。時局に乗り遅れまいと、「善意」のつもりで、発想しているつもりだろうが、三年後五年後にこうした時局におもねる提案が通用するとでも思っているのか。提案をうけたひとびとも、逼迫した時局に対応する必然を十分感じていることから、こうした新生活提案を、受け入れ、無思慮のままに、刷り込まれていくのに違いない。時局に呼応した大政翼賛的な提案や生活習慣を受け入れる人もいれば、そうした事態への反作用として、あらたな「三密」を提案するひとたちもでてくるだろう。すくなくとも詩を書く者としては、コトバを介して、他者と世界とつねにつながっていることを、自覚しつつ、他者への忌避をこえた、自己と他者との関係性を再構築していく試みを模索していてもいいのではないかと考えている。/今月の「Mélange」例会の第一部読書会は、ひさしぶりに同会に帰ってきた高谷和幸さんによる語り「テキストが語りだす…」ハンス＝ゲオルグ・ガダマーについて」がテーマです。(大橋愛由等記)

カフカ教団 ⑥ 高木敏克

次の朝、わたしの勤務先の倉庫会社「三幸商会」の入り口には見られない三人の男が立っていた。誰かを迎えるために立っているのだろう。ぴっちりとしたダークスーツはおそろいで、ネクタイの締め上げ具合からすると相当の地位の人がやってくると思えた。ただ一人だけ長髪の男がいて、ファッションモデルと見える長身で、この辺りにはいないタイプだった。近づくとも誰かが視線をそらせて不自然にわたしを無視しようとする態度をとった。こちららもつと相手を無視するように邪魔だなどという態度で通り過ぎた。

事務所に入り机に座るとすぐに電話がかかってきた。電話メモを読み返し古い順から返事しなければならぬのに、一番遅い相手と話すことになったので、投げやりな声で話しを受けた。

「総務から転送される電話は珍しい。」

「ご友人だとおっしゃる方からのお電話です。中村さまとおっしゃっています。」

「中村はたくさんいるな。下の名前は聞いてないの。」

「中村と言えはわかると、おっしゃるので聞いていません。」

「会社の名前は……まあいいからつないで。」

「あ、もしもし、タカギさんですよ。大阪府警のナカムラと申します。」

「そんな友達はいませんが、友達とおっしゃいましたよね。」

「すみません。捜査第一課とは言えませんがね。」

「言ったも同然です。この電話は録音されています。」

「じゃあ。掛け直します。」

「余計に困ります。用件は。」

おそろく、わたしのことは調べがついている。会ったほうが話は早い。最初に言うべきことは決まっている。

「お会いしますけど、条件があります。一回限りならお会いできます。それから、わたしの私生活についてはお話できません。よろしいか。」

「はいわかりました。少しお聞きしたいことがあります。あなたのことは何も聞きません。お近くの喫茶店カフカでお待ちしています。」

「でも、空いていますか。誰かいたら何も話しませんよ。」

「はい、今は誰もいません。さすがに用心深いですね。昔からも変わっていない。」

カフカ教団 ⑦ 高木敏克

地下にある重いドアはまるで風に吸い込まれるようにふわりと開いた。尾行を振り切るのはここだ。彼らは必ずトイレのドアを開けるに違いない。

「あきましたよ」と言ったのは外からドアを開けたカフカ教団の門番だった。

「この先は地下街になっていたのでしたか？ 地下道になっていたのでしたか？」

わたしはそう聞きつつ地下道に入るともつと恐ろしいところに通じることはわかっていった。いつものように寂しい風が吹き抜けていた。

「この先は長い地下道です」と門番の男が言った。ドアを叩くような音が鼓膜に響いた。

「開ける、開ける。お前の爺さんはなあ、カラフト流れのユダヤということはわかっているのだ。この記憶の悪魔どもめが……」

思わず、門番の男と顔を見合わせた。

「なにか、きこえましたか？」

「いや、なにも。たとえ彼らがツルハシでドアを打ち破ったところで、中には真っ暗な土が詰まっているだけです。」

「うめもどすのですか？」

「いや、もともと埋まっているのです。」

祖父の記憶によると、この建物は震災の津波と地盤沈下で一階部分が地下に埋まってしまったのだ。そのために一階の大きなドアの裏には土の溜りがないのだ。二階の大窓二つが一階の入り口に入れ替わり、一つは喫茶店の入り口になり、もう一つの入り口は上階の事務所と地下室に通じている。地下室には大きな暖炉があるが、それはもともと一階にあったものだ。海岸に近い湿った土地柄、地階の暖炉は火がつきにくかった。このことは祖父から聞いたわけではない。祖父はわたしが生まれる前にカラフトで死んでしまったのだから。わたしの家系では記憶は遺伝する。記憶は何度も夢の中に現れては研ぎすまされて現実以上の真実になっている。

◆ とりはだ

中嶋康雄

雲はつまらない
嘘は空にも漂っている
息を吸うと悪いものを吸う
終息がいわれたあと
誰も責任をとらない
歩きながらアイスクリームと一緒に食べました
アイスクリームは赤いので
よくめだつたみたいです
おいかけてほしくないあらゆる人と
くっついてほしくないあらゆる虫が
いつまでも笑う世界が終息後、だ
たとえお金を投げつけられても
口をもぐもぐ動かしながら
安い石油を飲んで
すべてがつまらないというのは簡単だし
どうにもならないほど平凡だ
電車が怖いのに
思うのもだめらしい

ハエの機械が飛びまわっている
思いをみつけられたら終わりたい
ビールを飲んで
泡にとまると
赤い目でじつとこちらをみている
もうなにかも曝されている
もつと曝すぞと脅される
逃げるのもつと傾いてしまう
包まれた晚餐がいつまで続くか
しわくちゃの服を脱いで
空っぽのプールで泳ぐ
ハエの機械が
とりはだの谷間で

◆ 鍵

中嶋康雄

サイコロをふっている
不安なカップラーメンが集まって
藁を持って踊っている
強い整髪剤のおいがする
もうやることがない皺が
よだれを垂らしている
和菓子にじつと見られている
お茶はどこか遠くで沸騰している
遠くで耳が鳴っている
冷たいよだれがこぼれている
土砂降りになる
なにかもがずぶ濡れで
なんだかうれしい
鍵が泣いている
いつまでも
ふらふらしている
錆びた
穴

和菓子が干からびて

◆ 積ん読の Pantomime

野口 裕

◆ 記憶の不全

野口 裕

梅雨時の
湿り気を帯びた部屋の
積ん読の中ほどに
故人の著書がある

ダルマ落としの要領で
引き抜いてみると
笑い声とともに
その他の著者が
雪崩を打った

そう言えば
山で死んだあいつの本は
どこだったかな
俺の書いた弔辞が載っているはずだが
しばらく読んでいない
読みたくない

笑い声が沈んだ頃に
またのろのろと
積み木遊びをはじめた

鋸刃を引いたのはいつだったか
いや引かなければいけないのに
押してばかりいたような感触も
それがまだ舌がもつれる前の話

電気回路図の抵抗も鋸刃でなく
長方形を描くようになったので
米の配偶者ゆえ稲妻だとの説に
残るギザギザはカミナリくらい
砂残るネジ穴と知らずネジ回し
ドライバーの腕へと伝う軋みに
砂粒の砕けつつ味覚は触覚だと
苦みを伴う味が舌を走り抜けた
鋸刃は押すではなく引くのだと
教えられた頃の話舌が記憶し
砕けた砂粒の振動は手から腕に
腕から肘に至り肘の記憶は消滅

舌の記憶が思い起こす五七五は
衰ひや歯に喰ひ当てし海苔の砂
当時、芭蕉の句を承知かどうか
今となつては舌にもわからない

◆鍋の底

黒田ナオ

ぶあつい鍋の底に見えてくる
娘の姿が見えてくる
娘が仕事から帰ってくる
暗い帰り道と外灯が見えている
その下を、疲れた娘が帰ってくる
足を引きずるようにして
わたしは台所で、鍋の底を
大きくかき混ぜる
ため息と夜と一緒にかき混ぜる

ふっふっふ
台所で待つ、わたしは
疲れた娘を待っている
足がもつれた娘はひっくり返り
泥まみれになつて
悶え苦しんでいる
わたしは急いで
階段を駆け上がり
二階の窓から石を投げる
娘に向かって石を投げつける
そのとき、ようやく
鍋の底で目を覚ます
大きな目玉が
目を覚ます

◆モナリザ

月村香

モナリザと称した肖像は
壁の上では
人を騙しきっている
それは丁寧に笑むばかりなのに
十センチヒールを
両足に組み込み
くるくる回り出し
はね上がる時

モナリザが人にチェンジする
モナリザが、だ
人はモナリザを地におろす
人は、だ
だるこむめいと
だるこむめいとの

花を胸に
レースの手袋の
指にその輪の形のトゲをつけ

赤の照明に
瞳がしきり
曇る
曇り燃え
ボーミーする
そのシルクハットの
断章の題名が
わたくしの唇に
いわんや 入ろうとする

その時
だるこむめいとは
わたしの首の方へと向いて
わたしがなぜここにいるか
わかるか
と述べた

◆かげろう

大橋愛由等

林相が破断したとき虚空に溶ける羽虫たち
（〈覆うものの数量化が困難を増したので「かなしい」と指でなぞってみる〉すべてが準備態と気づいた雨の朝、わたしは冷蔵庫の中から北辺の乳牛たちから撰れたレチエをぐくりと呑む。いつもの時間に郵便ボックスを覗いてみたがまだ母語の朝刊は来っていない。ヒヨドリを石もて追っていた公園の少女たちはきつと寝ているだろう。彼女たちの夢の中に入り込んだ情理はこう書き込むのに違いない。「さらに追加されるのは都市の見えない壁と笑う堤防にささっている案内板の誤植だろう」〈曲折する商店街を何度か往復するうちに立ち止まった乾物屋のまえで言った「さようなら」〉地図をなくしたと電話をしてきた友人はいまボクはどこにいるのか分からないらしく『ロートレアモン詩集』が愛想を尽かして失踪したのが傷を深くしたようで、なにはともあれ街に堕ちているあ行を拾い集めなくてはと焦っている様子を知り「海豚は夏の気配がする海域で寡黙になつたりするものだ」と慰めてみたつもりだったがボクはただ泣いている。〈石が南に歩きだす日にかぎって月は四角になろうとしている〉重ねていた積み木の向こうをふと覗いてみると母が「あなたは夏になると悪夢を見るから向こう岸の竹林に棲む神父の戯言がまじった丸薬を作っておくから」と言ってくれる。その丸薬は蝶の媚薬になるなんて母には伝えていないけれど、知っているのはわたしとボクと公園の少女と四角になった月なのだということは黙っておいたほうがいいのかそれとも今日の風にそつと耳打ちしたほうがいいのだろうか。

◆一枚の紙切れ

田村周平

引き取ってもらえば
古新聞より安い
けれど紙は重たい
最もふりまわされたのは
この紙切れ

一枚の紙切れに
翻弄されてきた
受験票に合格電報
宝くじに質札や勝馬投票券
結婚届に離婚届
日本銀行券にも

一枚の紙切れに
文字を書いて
書きつらねて
紙くずの山となった

嵐の中の笹舟は
沈むことなく流されていく
小さな存在として
大空と対峙している
まるで一枚の紙切れのように
けれど紙は消えようとしている
紙がなくなれば
もうふり回されることもない
昔から人は知っていた
神と紙は同じだって

ミード
甘い憧憬の一杯、蜂蜜酒

安城 位久緒 / Anjo Ikuo

室町時代の製法で再現した純米酒を飲んだ。あわい琥珀色で、甘味が美しい。

いにしへの酒は、甘露そのもの。紀元前に遡る、蜂蜜酒を思い出した。産地、製法、名前はさまざまだが、ミード (mead) と言えば、ファンタジー小説や映画、ゲームのファンにはおなじみだろう。ハリ・ポッターやクトゥルフ神話をはじめ、魔術師、神々、英雄の物語には欠かせない。

神話や古典文学では、甘やかなだけでなく、超越的な力、幻想や神託に似る酒。北欧神話の「詩の蜜酒」は強烈だ。蜂蜜と賢人の血で作られ、飲めば誰でも詩人や学者になれる。現存する英文学最古の作品のひとつ、『ベオウルフ』では、怪物を退治した勇士を称え、ミードを王宮で果てしなく酌みかわす。

常人でも、堪能できる。ハネムーン (honeymoon) という言葉は、新婚のひと月を祝う間、新郎新婦が強壯剤でもある蜂蜜酒を飲んだ習慣に由来する。チョーサーは『カンタベリー物語』の艶笑譚で、大工の若い新妻の色づぼさを、ミードに喩える。庶民的な高嶺の花に、ふさわしい。

ミードにハーブやスパイスで風味つけたメセグリン (meadglin) も、身分を問わず愛された。シエクスピア喜劇の『恋の骨折り損』『ウインザーの陽気な女房たち』では、ワインやビールと並ぶ定番の酒。エリザベス一世の、薬酒めいたレシピも残る。

トールキンの『指輪物語』『ホビットの冒険』のミードは、英雄を寿ぐ酒でありつつ、蜂を飼って手作りする素朴な飲物でもある。イギリス人の理想とする田園生活のイメージが、どこか重なる。

私をはじめ飲んだミードも、イギリスの、のどかな町からやってきた。ふらりと旅に出た友人が突然、コーンウォール地方から国際電話で、お土産は何がよいかと聞くので、とらさに「ミード」と答えた。そこは芸術とアーサー王伝説の地で、現代にミード醸造が復興し、ミードを飲ませる中世風の建物まで造られている。訪れたことはないが、憧れゆえか、覚えていた。

賛成した友人は、地元のお勧めミードをケースで国際輸送してほしいと、現地の宿の、老齢のママムにリクエストした。念のため、私も電話越しに通訳したが、友人によると、いつもは相槌まで古風な方言で話すママムが、このときはばかりは標準英語式に切りかえ、真剣な面持ちで応対してくださったらしい。

届いたミードは、薄紙で丁寧に梱包されていた。アーサー王を癒す、楽園の島の姉妹にちなむ銘柄だ。すこし冷やして飲んでみる。濃厚で強いのに、蜂蜜の微かな酸味もあり、意外と軽やかで切れない。海風がときおり吹き、うつすら赤紫色のヒースが花咲く、あかるく開けた丘陵を、空想した。

十数年が経ち、ミードは手に入りやすくなった。国産ミードも、近年クラフト・ミードが人気を集める米国のコンテストに入賞するほどだ。

でも、あまり気軽には手が出ない。電話とグラスで味わったコーンウォールが、特別だからか。そういえば、ミードを思い出させたあの古式復元酒も、日本ならではの伝説に満ちた島で造られている。濃密な歴史と物語が醸す美酒は、遠くて近く、近くて遠いかうこそ、ほどよく甘く酔わせる。

◆益田っこ通信

はじめ
元正章

▼45号／「世界がふるえる日」 〈2020.07〉

「けだし、万物が陣痛の苦の中でもだえつつ、人の子ら（人間）の和解を待ち望む……」（ロマ書8章）犬養道子著『人間の大地』より。

『感染症と文明―共生への道』（山本太郎著 岩波新書）を読んでいたから、あとがきに載っていました。早速、聖書に当たってみました。このような訳はありませんでした。新共同訳では「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。（中略）神の子とされること、つまり体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます」。犬養道子は、「再生の創造」「明日の土台づくり」という観点から、この聖句を引用しているのですが、かなり恣意的に過ぎます。でもこの犬養訳(?)は随分と示唆的であり、想像力を駆り立てて余りある名訳でした。

今回のコロナ禍は終息の気配を見せないため、日常生活がいまだに回復せず、これからどうなるのか定かではない限り、なんとも評価できませんが、「世界がふるえる日」を人類みな味わったことは確かです。ここで問題は、著者の山本医師が述懐するように、「皆さん一人ひとりが何かを感じ、大切なことは何なのかについて考えるきっかけになればと願っている」「ヒト以外が消えた世界で、ヒトは決して生きていけないことは確かなのだ」「わたしたち一人ひとりが、他者に共鳴し、共感する存在でありたい」。それゆえに、感染症は人類への挑戦というよりも、「人の子ら（人間）の和解を待ち望む」神からの警告と受け取ってもいいのではあるまいか。ウィルス感染と戦うのではなく、共生・共存の道を目指すようにと、著者は訴えている。「コロナが終わったとしても、忘れたくないことは何だろう」。それを己自身顧みて、内省する機会としたものである。

（編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです）

◆波の音に少しのワインを

大西隆志

原っぱに浮きだす
水蒸気の塊なのか
禁制の蟻を真似た
口上に恐れ戦いて
来歴が緩んだのか
ふらふらとさきへ
転がり出すようで
首も肩も痛いのだ
ゆるんだ決め事に
肉体は従っている
僕ら何も知らない

波が引いていくと
陽がともに去って
あたりは原っぱへ
ゆつくりと変わる
海岸段丘の夢へと
僕らは退化しては
記憶の微細な塊を
海風に乗せている
飛ぶのは世界の崖
命がけの飛翔から
一点に狙いを付け

先の尖った記憶の
螺旋へと続いては
歯止めの効かない
花火が淋しく上る
波の去った浜には
ワインの酔が伸び
点滅の夢一夜さえ
火薬のなさを競う
操舵輪を手にした
自由の人たちへと
幸運を引き寄せる

◆人の絨毯

高谷和幸

指をさす人が針金のような黒い腕を真つすぐに
伸ばしたその指の先とそれを受け止める別の手
のあいだに名付けられる距離があるわけではな
い。名を付されてから物語が始まり、そのため
に凍り付いた街を思い出すのがもう大義になっ
ているのかも知れない。ただ声を乞うために向
けられた顔が熱を帯びて、その内側に広がる味
蕾の密林の波が名指しされるものの本当の味わ
いを感じなくなるのが訝しいと思わない。水平
に伸ばした腕と対になる腕は上方に挙げられて
体の細い部分から足に至る着地の均衡をかうう
じて保っているふうでもない。それは沈黙する
ことが言葉の最終の到達であるようにと、身振
りによって語りださない意思を強く打ち出した
ものとは薄い身体から到底思われぬ。贈与さ
れたものから喪失、脱落、負荷と変わる重力そ
のものが無い。代わりに部分と全体の、逆に全
体から部分への接合に釣り合う謎めいた特異点
があるわけではない。天井画に描かれた創造主
とアダムが指をさすねじれた躍動性のような、
それはあらかじめ解された示される力の伝導
が指の先にあるふうでもない。指をさす行為は
代償を要求もせず、何等かの策略があるわけ
もない。

神戸詞あしび

142-2020.07.26 大橋愛由等

知らないことばかりである。欧州のフランス、イギリス、イタリア、ドイツ、スペインなどの歴史、社会、文化の知識(雑学でいい)ほどに、隣国について知っているかと言われれば、はなはだ覚束ない。映画や書籍で、韓国・朝鮮について、その歴史的事項に触れれば触れるほど、知っているつもりでいた自分がはざしくなる。

わたしが観た映画の話しよう。『1987、ある闘いの真実』(チャン・ジュナン監督、2013)は、日本がバブル景気に酔い、わたしの家庭では幼い子どもたちの成長を見守っているとき、韓国では、全斗煥政権による独裁政治に対する民主化闘争が勃発。当局の厳しい弾圧を押しつけて、抵抗が続けられていた。

『光州5・18』(キム・ジフン監督、2007)は1980年に起きた光州事件を扱い、『チスル』(オ・ミヨル監督)は1948年に起きた「済州島四・三事件」についてをテーマとして、それぞれのリアルな内容に衝撃を受けたものだった。

韓国映画の近現代史を扱った社会派映画は秀作が多い。もとの歴史的事実が重たい内容をはらんでいるからである。先日観た『マルモイ(ことばあつめ)』(オム・ユナ監督、2010)は、戦前に起きた日帝による1942年の朝鮮語学会事件をもとに作られている。戦局が逼迫していくに従って、「内鮮一体」を目指す日本は、朝鮮語教育を公的機関からしめだし、さらに朝鮮語による新聞・雑誌などの発行を禁じていく。民族の要諦のひとつである言語が奪われることに危機感を抱いた朝鮮の言語研究者は、朝鮮半島の各地で伝えられている言葉(方言)を蒐め、朝鮮語辞典をつくらうとしていた。しかし、日帝はこうした動きを「内鮮一体」にたいする反・皇民化の動きとみなして弾圧に乗り出す。

この映画には普遍的なテーマがいくつ

隣国について知っているつもりはなかったのだが



かつてソウルにあった朝鮮総督府。日帝の朝鮮半島支配の象徴的存在であった

か内包されていた。そのひとつは、それまで多様に存在していた朝鮮半島各地の方言を蒐集してそれを書き文字として記録していこうという言語にかかわるひとたちの情熱が確認されたことだ。それは失われていく自分たちの言語に対する共通した危機感があったこそその情熱であったのである。

同時に、映画の中で、「標準語」を決めていく作業が、日帝の監視をかくぐつて淡々と進められる場面が興味をひいた。日本でも、明治となり近代国家を形成する際に、それまであった各地の方言ではなく、全国どこでも通用する「標準語」=「国語」を策定しようとする国家ぐるみで取り組んでいた。それまで朝鮮半島の近代における「標準語」=「国語」策定作業がどのように行われていたのかは、知らなかった。日帝時代、朝鮮半島では多様な各地の方言が多様なままに存在していたのは確認できたが、それを統覚された国民・国家の「標準語」に仕立て上げる過程が、日本と異なっていることに気づいた。つまり日本は、国家という装置を動員して書き文字の「標準語」=「国語」を策定していったが、朝鮮半島では民間の言語にかかわるひとたちが、自らの手で「標準語」を決めていこうとしていたと理解していいのだろうか。

自分たちの言葉が為政者によって奪われる経験をもたない立場からすると、書き言葉、話し言葉ともに根こそぎ言葉が奪われる危機感を想像することは容易ではない。また戦前そして戦後の日本でも学校空間において方言の禁止=標準語励行が徹底していたことも忘れてはならない。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.153

神戸

2020年07月26日 通巻153号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税別)